

令和7年度

自己評価シート（重点目標）

園の重点目標

園児一人一人の自己受容を育む

本自己評価は、園の教育・保育実践が「自己受容の育ち」という観点からどのように機能しているかを振り返り、改善につなげることを目的とする。評価結果は施設関係者による評価を経て、公表する。

I. 評価の基本的な考え方

- 自己受容とは、「できる・できない」に関わらず、**自分の存在や気持ち**が大切にされていると感じられることと捉える
- 行動の結果だけでなく、**過程・気持ち・その子らしさ**を重視する
- 数値評価と記述評価を併用し、説明責任を果たす

【評価方法】

- 各項目について5段階で評価する
- ①十分でない／②やや不十分／③概ねできている／④できている／⑤十分にできている
- あわせて具体的な取組やエピソードを記入する

II. 評価項目

1. 保育者の関わりと姿勢

- | | |
|-------------------------------------|---|
| 1-1 園児の気持ちや考えを否定せず、まず受け止める関わりができている | ④ |
| 1-2 失敗やうまくいかない経験を、成長の過程として大切にしている | ④ |
| 1-3 一人一人の違いや個性を尊重した声かけ・援助を行っている | ④ |
| 1-4 「できた／できない」だけで評価しない関わりを意識している | ④ |

【分析】

今年度は、保育者の関わりにおいて「否定しない」「感情を受け止める」姿勢が園全体に広がってきたことが確認された。

失敗やできない姿に対しても評価や指摘を優先するのではなく、まず子どもの気持ちに寄り添い、その過程を認める声かけが増えている。

また、「ありがとう」「助かったよ」といった言葉を日常的に用いることで、子どもが自分の存在や行動に価値を感じられる関わりが意識されていた。

これは、本園が大切にしている「自己受容を育む保育」が、理念にとどまらず日々の実践として根づいてきた表れであると考えます。

一方で、「受け止める」と「見守る」ことの違いや、勇気づけと甘やかしの線引きについては、さらに共通理解を深めていく必要がある。

今後は、具体的事例を通して関わりの質をさらに高めていく。

2. 保育環境・活動内容

- 2-1 園児が自分で選び、決めることができる場や時間を確保している ④
- 2-2 年齢や発達に応じ、安心して挑戦できる活動を設定している ③
- 2-3 比較や競争を過度に強調しない活動構成になっている ④
- 2-4 園児が「自分らしくいられる」居場所や関係性がある ④

【分析】

活動場面において、保育者の声かけが無意識のうちに競争やスピードを促してしまう場面があったことを振り返ることができた。

「どっちが早いかな」といった言葉は一見意欲を引き出すように見えるが、子どもによっては比較意識や焦りを生む可能性がある。本園が大切にしている自己受容の視点から考えると、結果や順位ではなく、一人ひとりのペースや選択を尊重する環境づくりがより重要である。

制作活動などにおいては、子どもが自ら選び、決める場面をさらに増やすことが課題として挙げられた。一方で、「今日やらなくても明日でもよい」と柔軟に対応する実践や、「1番でなくても大切にされている」というメッセージを意識的に伝える関わりは、子どもが安心して自分らしくいられる環境づくりにつながっている。今後は、無意識に生まれる“比較”や“競争”の要素を見直しながら、子ども一人ひとりのペースと選択を尊重する保育をさらに深化させていく。

3. 園児の姿から見る自己受容の育ち

- 3-1 自分の気持ちを言葉や態度で表現しようとする姿が見られる ④
- 3-2 失敗しても再挑戦しようとする姿が見られる ③
- 3-3 他児の違いを受け入れ、互いに認め合う姿が見られる ③
- 3-4 安心して過ごし、感情を安定して表出できている園児が増えている ③

【分析】

今年度は、子どもが自分の気持ちを安心して表現できる場面が増え、子ども同士が互いの思いを理解し合おうとする姿が見られた。

保育者が気持ちを言葉にして代弁することで、感情の整理や言語化が促され、友達との関係性の中で助け合いや思いやりの行動が育っている。

一方で、感情を外に出すことが苦手な子どもへの支援については、さらに工夫が必要であることが確認された。

また、子どもが気持ちを切り替えるまで十分に受け止めきれない場面もあり、受容の質を高めることが今後の課題である。

本園が目指す「自己受容」は、感情を抑えることではなく、どのような気持ちも大切にされる経験を積み重ねることで育つものである。

今後も、一人ひとりの表現の仕方に寄り添いながら、安心して自分を出せる環境づくりを継続していく。

4. 保護者との共有・連携

- 4-1 園児の良さや成長を、保護者に具体的に伝えている ④
- 4-2 園の考える「自己受容」について、丁寧に説明している ③
- 4-3 保護者の不安や悩みに寄り添う姿勢を大切にしている ③

【分析】

日々の送迎場面における保護者との関わりは、園と家庭をつなぐ重要な時間である。

個人送迎の保護者とバス送迎の保護者との間でコミュニケーション量に差が生じやすいという課題が挙げられた。限られた時間の中であっても、1～2分の対話を大切にし、事務的な連絡だけでなく子どもの小さな変化や成長を伝えることを意識している。

一方で、本園が大切にしている「自己受容」の保育観について、担任から十分に説明できていないとの振り返りもあった。理念が日常の実践としては根づいてきている一方で、その意図や背景を保護者と共有する機会が十分でなかったことが課題である。

今後は、日常の対話に加え、懇談会やおたより等を通して本園の保育観をより丁寧に発信し、家庭と共に子どもの育ちを支える関係性を深めていく。

5. 組織としての取組・体制

- 5-1 職員間で園児理解や関わりについて共有・対話する機会がある ④
- 5-2 自己受容を育む保育について、研修や振り返りを行っている ④
- 5-3 管理職が方針を明確に示し、現場を支えている ④

【分析】

今年度は、職員が一人で課題を抱え込まず、同僚へ思いや悩みを共有できる風土が育ってきたことが確認された。

情報共有も意識的に行われ、組織として子どもの姿を見守る体制が整いつつある。

一方で、非常勤職員との連携については、子どものいない環境での話し合いの時間を確保する必要性が課題として挙げられた。勤務形態の違いがある中でも、保育観や子ども理解を共有するための仕組みづくりが今後求められる。

園内研修は、外部講師からの学びだけでなく、日常の保育を振り返る機会として機能している。今後も対話を重ねながら、組織全体で保育の質を高めていく。

Ⅲ. 総合評価

1. 重点目標の達成状況（自己評価）

- ①未達成 ②一部達成 ③概ね達成 ④達成 ⑤十分達成 ③

【総合所見】

本年度の自己評価を総括すると、「自己受容を軸とした保育の基盤づくり」が進んだ一年であった。

保育者の関わりにおいては、否定しない姿勢や過程を認める声かけが広がった。

環境面では、比較や競争を無意識に生み出していないかを振り返る視点が育った。

子どもの姿からは、感情表現や相互理解の芽生えが確認された。

保護者との連携では、日常の対話の質を大切にする姿勢が見られたが、理念共有の課題も明確になった。

組織体制では、抱え込まない風土が育ちつつある一方で、全職員への共有の仕組みづくりが求められる。

これらを総合すると、方向性は明確であり、実践も進んでいるが、園全体の文化として定着させる段階には至

っていないと判断した。

したがって、本年度の総合評価は3点とする。

これは不十分という意味ではなく、「深化の途中にある」という誠実な自己認識である。

IV. 次年度に向けた改善の方向性

① 強みとして継続する取組

1. 否定しない・過程を認める保育者の関わり

- 失敗を責めない姿勢の継続
- 結果よりも過程に注目した声かけ
- 「ありがとう」「助かったよ」など存在を承認する言葉の積み重ね

→ 自己受容の土台として今後も大切にす。

2. 比較や競争に偏らない環境づくり

- 順位や速さを基準としない声かけ
- 子どもが選択できる場面の確保
- 「今日でなくてもよい」という柔軟な活動設計

→ 子どものペースと主体性を尊重する環境を継続。

3. 子どもの感情を言語化し支える関わり

- 気持ちの代弁
- 相互理解を促す仲立ち
- 受容的な態度の継続

→ 感情教育の質を維持・深化。

4. 職員が抱え込まない組織風土

- 情報共有の継続
- 園内研修での振り返り文化

→ 保育の質を支える基盤として継続。

② 課題と改善策

1. 自己受容の“見えにくさ”

課題

自己受容がどの程度育っているか、評価が難しい。

改善策

- 年2回、子どもの姿を事例で共有する「自己受容ケース会議」を実施
 - 発達の視点と合わせて観察項目を整理する
 - 子どもの変化を具体的エピソードとして記録する
-

2. 感情を出しにくい子への支援

課題

表出が少ない子への関わりが十分とは言えない。

改善策

- 担任間で対象児を共有し、関わり方を検討
 - 安心できる個別時間を意図的に設ける
 - 感情カードや表現ツールの活用検討
-

3. 保護者への理念共有不足

課題

自己受容の保育観が十分に伝わっていない。

改善策

- 懇談会で具体事例を用いた説明
 - 園だよりに「今月の自己受容エピソード」掲載
 - バス送迎家庭向けの情報発信強化
-

4. 非常勤職員との理念共有

課題

勤務形態の違いにより対話時間が不足。

改善策

- 学期に1回、全職員参加の理念共有ミーティング
 - 15分でも良いので短時間共有タイムの制度化
 - 保育観を簡潔にまとめた園内資料の作成
-

5. 職員の“心の余裕”

課題

保育の質は職員の精神的安定に左右される。

改善策

- 業務の優先順位整理
- 無理な行事準備の見直し
- 月1回の振り返りタイム確保

施設関係者評価

1. 園の教育・保育方針への評価

- 子どもの個性を尊重し、「1mmの成長」に着目する姿勢
- 早さや量ではなく、丁寧さや過程を大切にする評価観
- クラス全体で「待つ」「助け合う」文化を育てようとする取り組み

について、概ね理解と共感が示された。

競争的な価値観ではなく、子ども一人ひとりの歩みを認める姿勢は、園の教育理念である「心のコップ（自己受容・思いやり）」を育てる実践として評価されている。

2. 安全確保への信頼と期待

保護者は、

- 避難訓練等の安全場面では安全最優先での対応
- 危険行動に対する明確な介入
- 必要に応じた強制介入の実施

について、明確な基準を持つことを支持している。

子どもの主体性尊重と同時に、命に関わる場面では迷いなく介入する姿勢は、園への安心感につながっている。

3. 保護者連携に対する要望

保護者からは、連絡・面談の在り方について次の要望が読み取れた。

- 良い点だけでなく、課題やつまずきも率直に共有してほしい
- 子どもが悲しんだ場面や困難だった場面を具体的に知りたい
- 家庭でのフォローにつながる情報を求めている
- 活動内容や子どもの反応が客観的に分かるフォーマットへの期待
- 「優しさ」と「厳しさ」の間で、客観的に伝えてほしい

園と家庭が協働して子どもを支えるための、より具体的・双方向的な情報共有体制の強化が期待されている。

4. 就学移行への期待と不安

自由度の高い園生活から小学校への移行については、

- 「座って話を聞く」等の基礎的な集団行動の経験をどう積むか
- 学校制度とのギャップによる初期適応への不安

が示された。

一方で、長期的な成長の土台として、

自己受容・思いやり・勇気・愛情を育むことの重要性については理解が共有されている。

園に対しては、理念を守りながらも、就学移行を見据えた実践の継続が求められている。

総合評価

施設関係者は、園の理念および日々の実践について概ね理解と信頼を示している。

その一方で、

- 安全基準の明確化

- 就学を見据えた準備
- 課題も含めた具体的な情報共有

といった「安心の根拠」をより明確に示すことが、今後の信頼深化につながると考えられる。

園としては、

子どもの心を満たす保育を土台としながら、保護者との連携強化と就学支援の具体化を引き続き推進していく必要がある。